

大雄会の 専門家に聞いてみよう!

Daiyukai Health System

年齢とともに起こるまぶたのトラブル まぶたのたるみ、逆まつげ

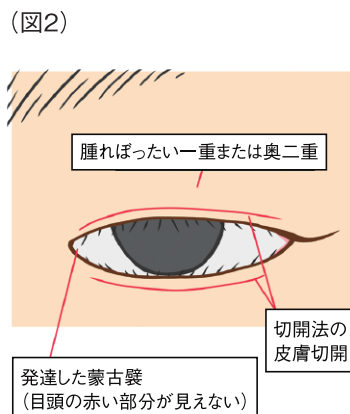
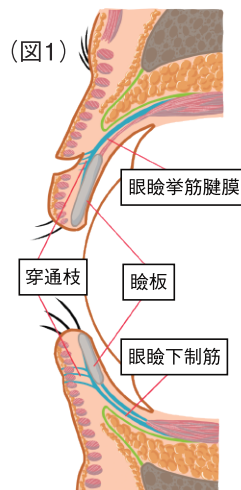
眼瞼下垂(まぶたのたるみ)と眼瞼内反(逆まつげ)の悩みを相談に来られる方が多くなっています。まぶたは生活の質(Quality of Life)に影響する大事な部分ですが、症状があっても、それが治療できる場合があることを知らない方も多いのではないのでしょうか。そこで今回は眼瞼下垂、眼瞼内反の原因や症状、治療についてお話しします。

第四回 眼瞼内反について

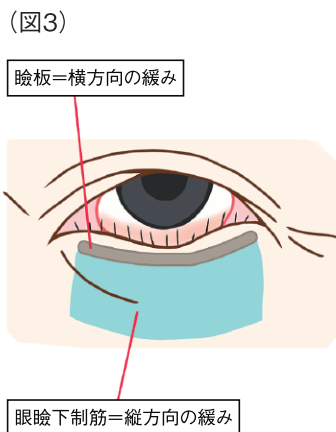
今回は逆まつげ(眼瞼内反・睫毛内反)についてお話しします。

逆まつげは、まつげが眼球に接触して痛み、異物感、流涙(なみだ)、眼脂(目やに)、羞明(まぶしさ)などの症状を来します。眼球の表面に傷がつくほどだと、手術の適応となります。

若年者に起こるものは、まつげを外側に引っぱる「穿通枝」と呼ばれる構造が欠けていることが原因です(図1)。上まぶただと、この穿通枝によって二重まぶたのラインができます。赤ちゃんだと自然に改善しづらくなり、手術が必要になることがあります。手術はまつげのすぐ近くの皮膚を内部の瞼板に結びつける「埋没法」「切開法」と呼ばれる方法で行います(図2)。目頭の蒙古襞の発達が強い時は目頭切開を行うこともあります。



高齢者に起こるものは、まぶたの様々な構造の弛みが原因です。上まぶただと眼瞼下垂として現れますが(眼瞼下垂と同時に内反も起こることがあります)、下まぶただと眼瞼内反となります。手術は眼瞼下制筋、瞼板などのどの構造が弛んでいるかで方法が変わり、いくつかの方法を組み合わせて行うこともあります(図3)。



今回お話ししたまぶたの悩みは保険適応での治療が可能な場合があります。まずはかかりつけの眼科や形成外科にご相談ください。



監修

形成外科診療部長

いとう ゆうすけ
伊藤 悠介 医師

〈主な資格〉

- ・日本形成外科学会認定形成外科専門医
- ・日本熱傷学会認定熱傷専門医
- ・日本創傷外科学会認定創傷外科専門医

